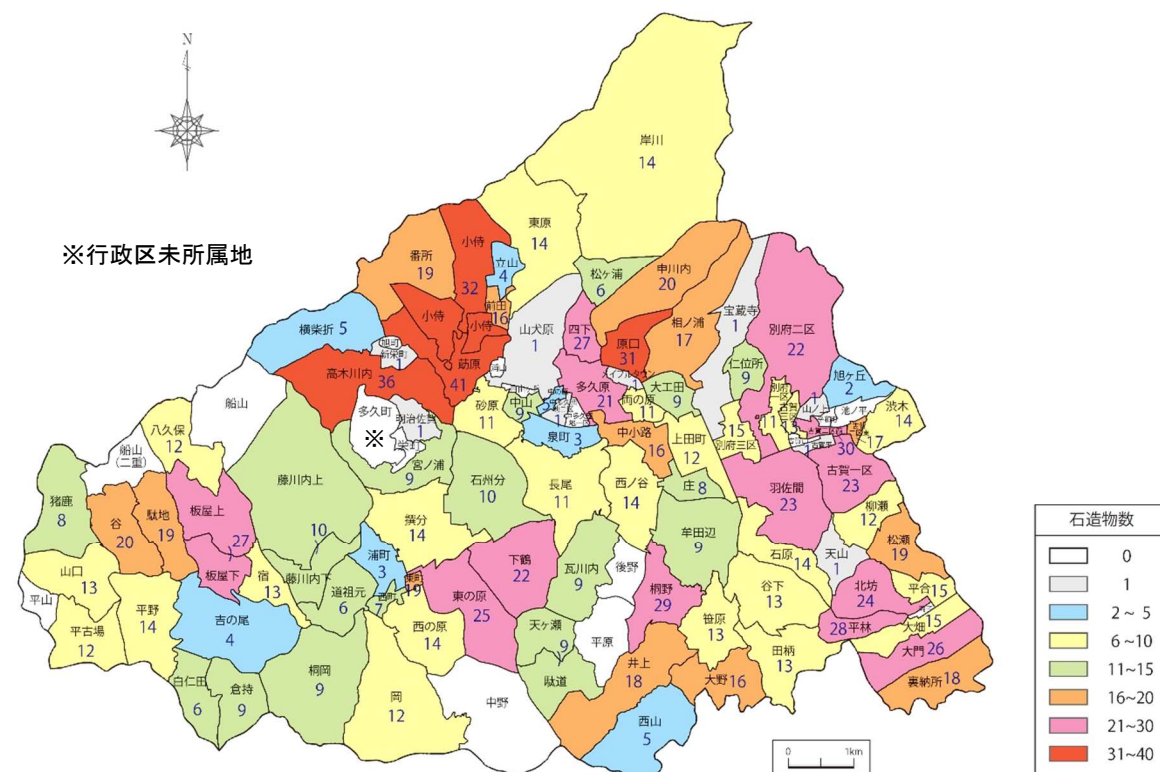


石造物

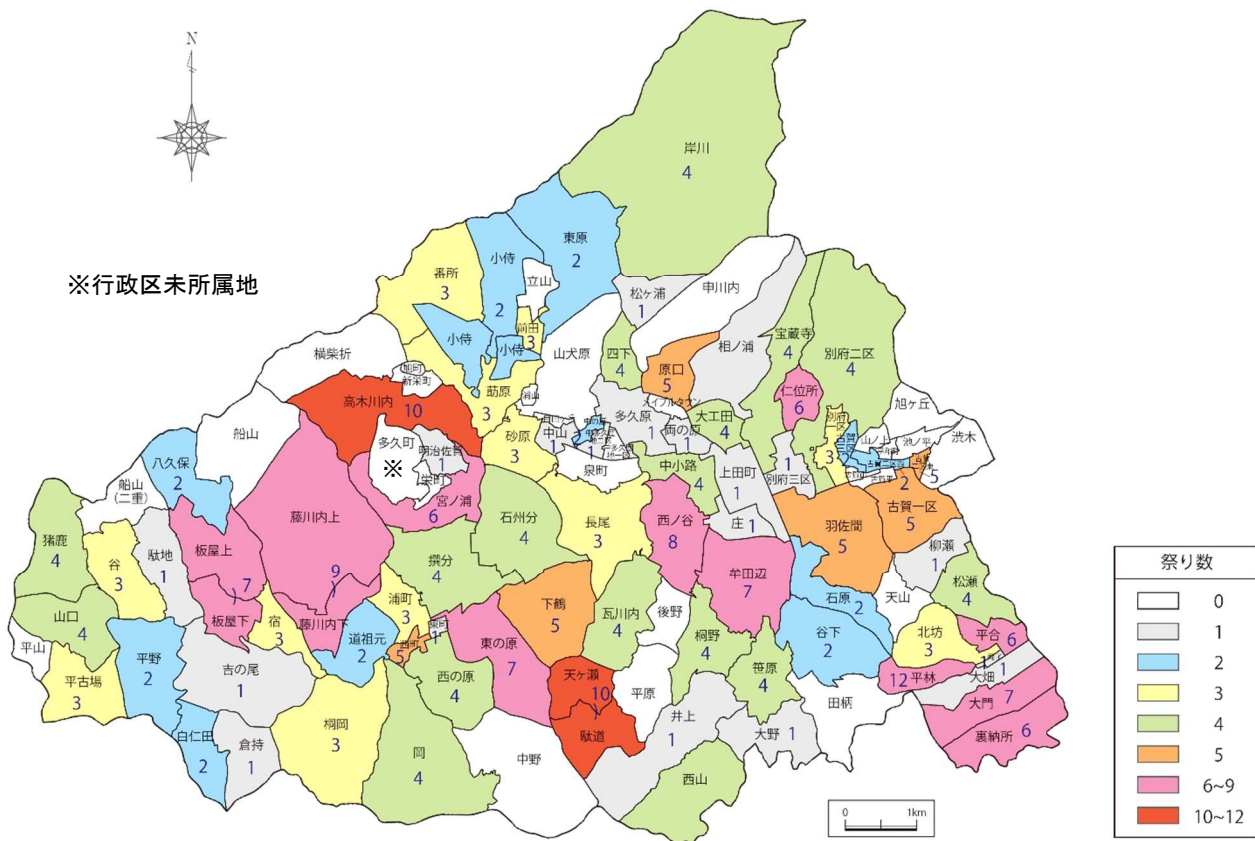
形態	名称など
塔	地主大明神塔 地神塔 中央塔 中央大日如来塔 刻像弁財天塔 山神宮塔 猿田彦大神塔 船山靈神塔 太良嶽大権現石塔 文字蛭子塔 西之宮大明神塔 刻像大黒天塔 多聞天王塔 宇佐八幡神社塔 七地蔵塔 毘沙門天像塔 妙見大菩薩像塔 穀神之主塔 諏訪大明神塔 八天堂塔 五穀神塔 豊満宮塔 宝満社塔 庚申塔 庚申六地藏塔 青面金剛塔 五輪塔 木花開耶姫命塔 名号塔 天照皇太神宮塔 大日如来像日待塔 二十三夜塔 観音講塔 百万遍念仏塔 題目塔 層塔 読誦塔 一字一石塔 写経塔 逆修供養塔 三界万霊塔 南無観世音菩薩塔 子安観音塔 馬頭観世音塔 地藏菩薩塔 六地藏塔 慈眼視衆生観音塔 四仏塔 三十番神塔 鬼子母神塔 宝篋印塔 他
石祠	天満宮石祠 中央神石祠 水神社石祠 弁財天石祠 巖島神社石祠 龍王石祠 山王社石祠 龍王三蛇石祠 風大明石祠 金毘羅大権現石祠 金毘羅神社石祠 沖大明神石祠 山神石祠 白山大権現石祠 観音講石祠 宮地嶽三柱神石祠 宮地嶽神社石祠 英彦神社石祠 天山社石祠 合祀大黒天石祠 稻荷社石祠 八幡大神社石祠 八幡宮石祠 愛宕神社石祠 毘沙門天石祠 摩利支尊天石祠 妙見大菩薩石祠 黒髪権現石祠 疱瘡神社石祠 疫神社石祠 八天狗社石祠 秋葉神社石祠 秋葉大権現石祠 諏訪大明神石祠 二十三夜石祠 太神宮石祠 子安観音石祠 十一面観音石祠 大日如来石祠 他
像	恵比須像 大黒天像 弾丸除観音像 聖徳太子像 観世音菩薩像 十一面観音像 狐像 六体地藏像 三十三観世音菩薩像 新四国八十八ヵ所観世音菩薩像 西国三十三所観音像 石原空照師像 薬師如来像 新四国八十八ヵ所の諸仏像 新四国八十八ヵ所不動明王像 新四国八十八ヵ所アワー一番弘法大師像と釈迦如来 猪像 山王(猿)像 他
碑	天照皇太神宮碑 大宝聖林碑 兵糧小路舊跡碑 番所関所跡碑 斗南窪田君碑 記念碑 板碑 鎮魂之碑 在日朝鮮人帰国記念樹の碑 草場佩川生誕地碑 農会設立五十年記念碑 耕地整理記念碑 多久茂族碑 日露戦争凱旋記念碑 他
殿	天満宮石殿 山王社石殿 熊野大権現石殿 道祖神石殿 他
鳥居	肥前鳥居 折衷型鳥居 小型鳥居 明神鳥居 他
その他	仰高門 石門 灯籠 肥前狛犬 水盤 丁石 道標 番号石 真言十三仏 石敢當 力石 石橋 西国三十三所観音の諸仏 蚕神社石祠 道祖神 他



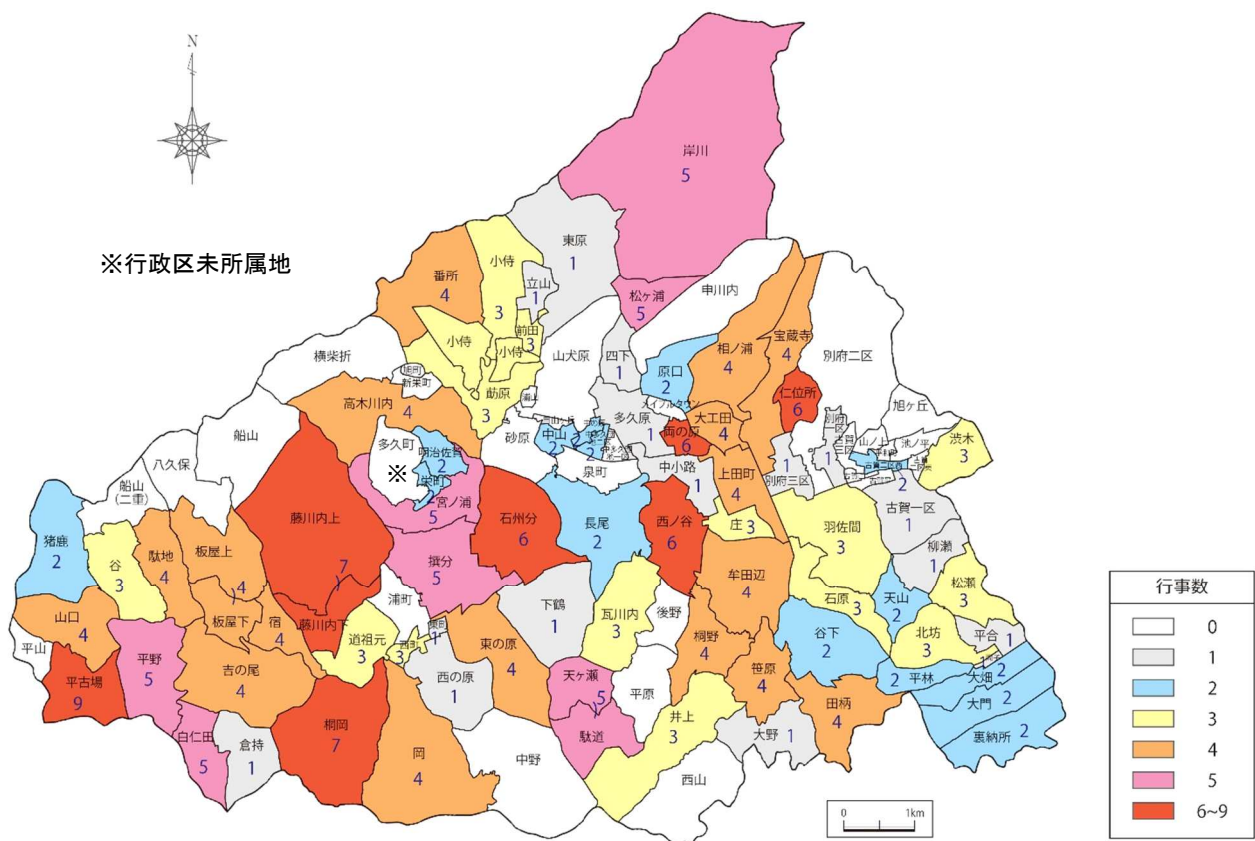
資料 18 行政区別の石造物数

祭りと行事

祭り 291 件	宝満社祭 大般若さん祭り 恵比寿祭り 春の祈願祭 六体地藏尊祭 水神祭り 風祭り ムラ祭り 壱日祭り 薬師寺祭り 地藏さん祭 彼岸祭り 十三日祭り 天山社祭り 巳て祭り 大黒天祭り 弁財天祭り 鬼子母神祭り 龍王さん祭り ぼんたん祭り 満手餅祭り むつごろう夏祭り 春祭り 阿弥陀様祭 風通夜祭 ナマス祭り 水の出口弁財天祭り 厄神さん祭り 12月15日祭り 大神宮祭り 初祭り 暮祭り 八天祭り 二十五祭り 勘太郎慰霊祭 天神さん祭り 大黒さん祭り 宝満祭り 阿弥陀様祭 兵糧小路祭り 観音さん祭り 宝満宮祭り 八天さん祭り ふれあい夏祭り 子供みこし祭り 天神祭り 八大龍祭り 社日 村祈祷・祇園祭り 五穀神祭り 五穀神さん 先祖祭り 風神祭り 権現さん祭り 十五日祭り 中尾神社年末・年始祭 毘沙門天祭り 木村さん祭り 若宮さん祭り 土橋さん祭り 厄神さん祭 少弐さん祭り 宝満さん祭り 風神様祭り 立山神社例祭 金毘羅神社祭り 宝満社御田祭り 他
行事 255 件	もぐら打ち 灯籠付け 村祈祷 風籠り 鬼火焚き さなぼり 彼岸籠り 権現さんお籠り 花煎り 宝満さんお籠り 天山さん籠り 風通夜 両子神社供日 風籠り灯夜 風透夜 お供日 花煎り十五夜 地藏さん祇園 豆茶籠 彼岸道作り 春酒盛り 大般若さん 虫祈祷 お彼岸 お茶や 秋の彼岸籠り 岡相撲踊 おくんち シメ縄作り 江隅墓地無縁仏供養 田植籠り お日待 さなぼりさん お茶講 神待ち 二百十日風籠り 村祈祷と新年会 神待ち透夜 お大師さん茶講 うどん打ち 宮地嶽供日 つくりあがり籠り 春餅搗き 彼岸行事 早苗ぶり 天満宮さん灯夜 阿弥 陀さん灯夜 彼岸山道つくり 田植仕舞い御籠り 夏祭り子供みこし 盆踊り大会 他



資料 19 祭りの件数（行政区別）



資料 20 行事の件数（行政区数）

多久市の伝説（概要）

【鬼の鼻伝説】

昔この一帯に沢山の鬼が住み、村里に来ては村人に乱暴を働いた。村の鎮守の神様は鬼たちに提案した。「一晩のうちに富士山より高く美しい山を築くことができたなら、ここをお前たちにやる。できなかったら、ここを出ていけ。」

それを聞いた鬼たちは二手に分かれて東から西から、大きな掛け声とともに土や石をどんどん積み上げていった。鬼たちの力は強く、2つの山はたちまち1つの大きな山になり始めた。神様は何か妙案はないかと考え、一番鶏に化けて大きな声で鳴くと、鬼たちは夜が明け始めたと思い逃げていった。鬼がつくりかけた山は、上を向いた顔のように見え、東の聖岳が額にあたり、西の山が尖った鼻に見えるため鬼の鼻山と呼ばれている。

【松浦佐用姫と長者原】

大伴狭手彦と松浦佐用姫の伝説は日本三大哀話として知られる。今から1400年も昔、朝廷は朝鮮半島の任那に援軍を送ることになり、狭手彦を指揮官に数千の兵が派遣された。松浦に滞在した狭手彦の身辺のお世話をしたのが長者原（北多久町横柴折）の篠原長者という豪族の娘松浦佐用姫だった。豪族の屋敷は花が咲き乱れお花屋敷と呼ばれていた。狭手彦は佐用姫と互いに好意を寄せたが、任務のため任那へ出発し、佐用姫は狭手彦との別れを嘆き悲しみ石になってしまったと伝える。

【百合稚伝説と鬼神社】

百合稚は松浦佐用姫伝説の中で、松浦に来ていた大伴狭手彦と、篠原長者の娘佐用姫の間に生まれ、長じて別府（東多久町）辺りを所領した。

ある時、百合稚は朝廷の命によって筑前国の異賊征伐（鬼退治）に向かい、慣れない船軍の戦いに疲れ、玄界島で寝入ってしまった。これを見た家臣の別府太郎宗冬は、主人百合稚を玄界灘の孤島に置き去りにして別府に帰り、百合稚の館を奪い居住した。別府川の付近には別府殿屋敷の地名が残るという。

鬼神社は百合稚が鬼退治のおり、鍛冶に太刀をつくらせたことから鍛冶を祀り、最初は鬼鍛冶社だったが、誤って鬼神社と伝えられた。

【核割れ梅】

少弐（武藤）氏は、建久7（1196）年に源頼朝から太宰少弐の役と、筑前・豊前の守護職を任せられ、北部九州の政治、軍事の実権を握った。

少弐氏13代政資の時、周防の大内義興に敗れ、逃れた政資は、妻桔梗の父、梶峰城の多久宗時を頼るが叶えられず、ついに専称寺の境内で最期の時を迎えた。政資は本堂前の石に腰をかけ、辞世の一首を「花ぞ散る 思へば風の科ならず 時至りぬる春の夕暮れ」とのこすと、梅の実を噛み割って地に投げつけたのち自刃を遂げた。投げつけた梅の実のはちに芽吹き実をつけたが、その核は政資の噛み痕の名残が割れ目があつたという。専称寺本堂前の梅の木をそれから核割れ梅といい、そばの石は政資が腰をおろした血曳きの石という。

政資の子、14代資元も多久で最期を迎えており、父子の墓（少弐政資・資元父子の墓[市重文]）は専称寺墓地にある。

【柴折峠^{しばおり}】

天正元（1573）年、武雄の後藤貴明の軍が志久村に進軍したとき、多久勢龍造寺長信軍の若武者与七郎は、物見として峠にさしかかり、後藤勢の八右衛門に出会った。与七郎は峠が血に染まるほどの死闘の末敗れて死んだ。与七郎の遺骸は放置されていたので、峠を行く人々が憐れみ柴を折って遺骸を覆い、与七郎の冥福を祈った。それから柴折峠と呼ばれたという。

【太閤の腰掛け水】

豊臣秀吉が朝鮮出兵のおり、名護屋城に向かう途中の渋木（東多久町）で喉が渇き、休息して腰掛け、槍で地面を突いたら水が湧き出したといい、太閤の腰掛け水と呼ばれている。現在の自動車学校そばの井戸のことである。

【金ヶ江三兵衛伝説^{かねがえ}】

朝鮮出兵の際、鍋島直茂軍は道に迷い韓人に道案内を頼んだ。その韓人の姓は李^りといった。帰国の時、直茂は彼を連れ帰ることにし、多久安順の船に同船した縁で安順が預かることとなった。多久に帰り、安順が彼に祖国での職業を尋ねると、焼き物を焼いていたと言うので、窯を築かせたのが西の原^{とうじん}の唐人古場窯跡（肥前陶器窯跡[国史跡]）と伝える。その後、山口（西多久町）の高麗谷^{こうらいだに}や、藤川内（西多久町）の大山^{おおやま}で窯を築いたが満足いかず、山を越え有田に行った。そこで陶石を発見し、磁器を焼いて今日の有田焼の基礎を築いたと伝える。彼は郷里の金江島にちなみ、日本名を金ヶ江三兵衛に改めたといわれる。有田の地では、陶祖李三平^{りさんぺい}と伝える。

【孝子吉之助^{きちのすけ}と目達原仇討ち^{めたばる}】

瓦川内（南多久町）の百姓与四兵衛は、佐賀城下で藩士の体に触れてしまい手打ちにされた。与四兵衛の息子で 16 歳になる吉之助は嘆き、仇討ちを決意、ちょうど武雄に剣豪宮本武蔵が滞在していると聞き、訪ねて教を乞い弟子となった。

5 年の剣の修行に励んだ吉之助は、武蔵の口添えで鍋島直茂から侍の身分と、目達原（神埼郡吉野ヶ里町）で仇と立ち合うことが許され、武蔵直伝の唐竹割をあびせみごと仇を討ったという。

【多久聖廟と龍】

多久聖廟[国史跡・重文]に多久家の絵師、御厨夏園^{みくりやかえん}が描いた蟠龍^{はんりゅう}と呼ばれる大きな龍の天井画がある。聖廟の創建から間もない頃、その龍は夜、池の水を飲み天井を抜け出して村人を驚かせていた。

村人は龍が絵から抜け出さないようにうろこを一枚だけ剥がしたところ、それ以来、龍は天井におさまったという。

【林姫哀話^{りんひめあいわ}】

江戸時代、多久 7 代領主茂堯^{しげたか}の娘林姫は、身分の違う家臣の息子と恋に落ちて身籠った。流産することとで不問にしようとした父茂堯であったが、送った使者たちはその意図をくめず、責められた林姫は 19 歳の若さで自害し、後に相手の男も切腹した。

やがて多久家には凶事が相次ぐようになり、これを林姫の怨念と考えた 10 代茂澄^{しげすみ}は、高名な僧を招いて祈祷を行なったところ、林姫の霊が現れ「自分の霊はいまださまよっていたが、西の原に堂を建て祀れば、多久家の繁栄と女性の安産を守護する」と誓ったことから、同地に堂を建て、法華経を墨書し

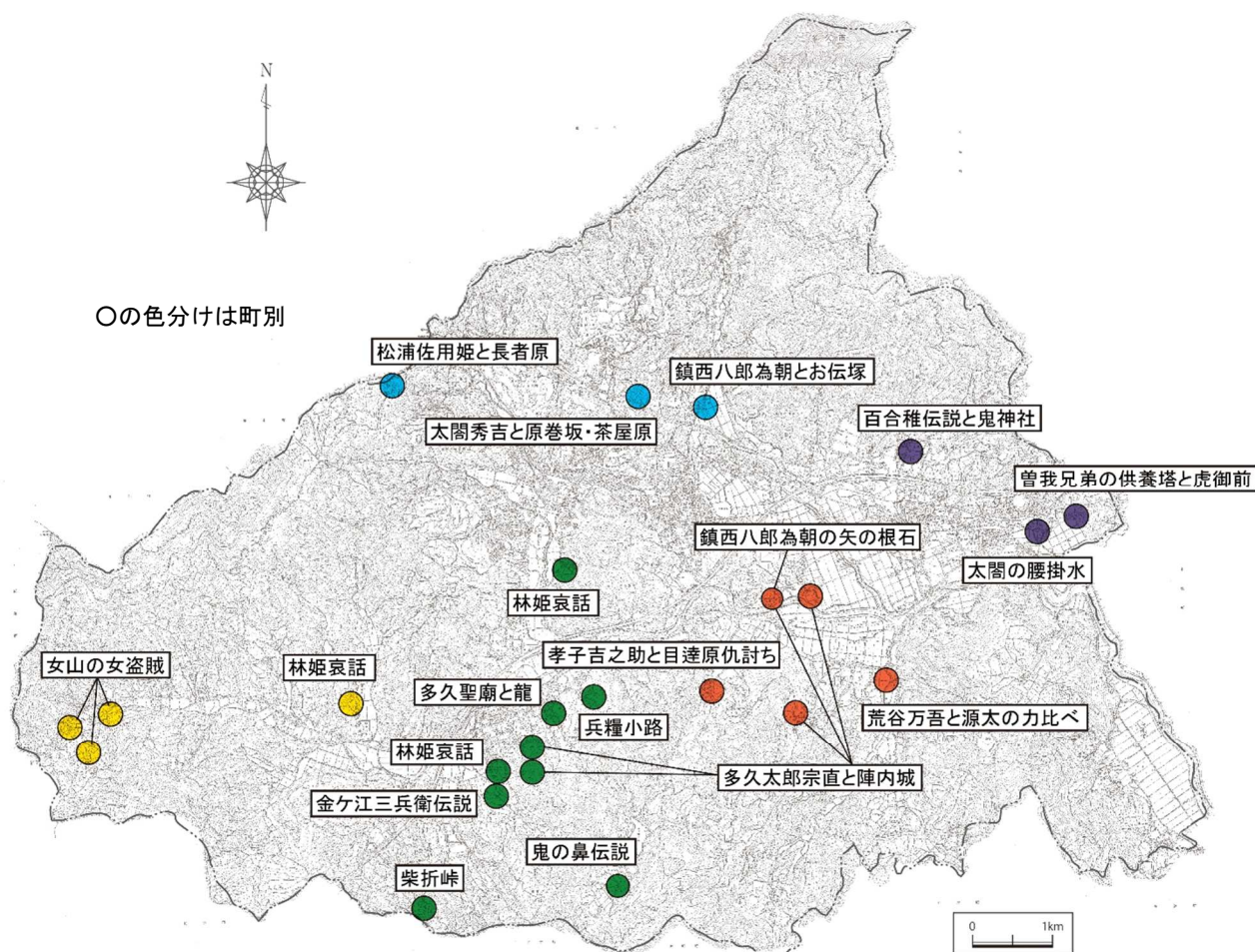
た一字一石経[市重文]とともに林姫の遺骨を供養したのが、西の原大明神の始まりと伝える。現在も妊婦の安産祈願は絶えない。

おんなやま

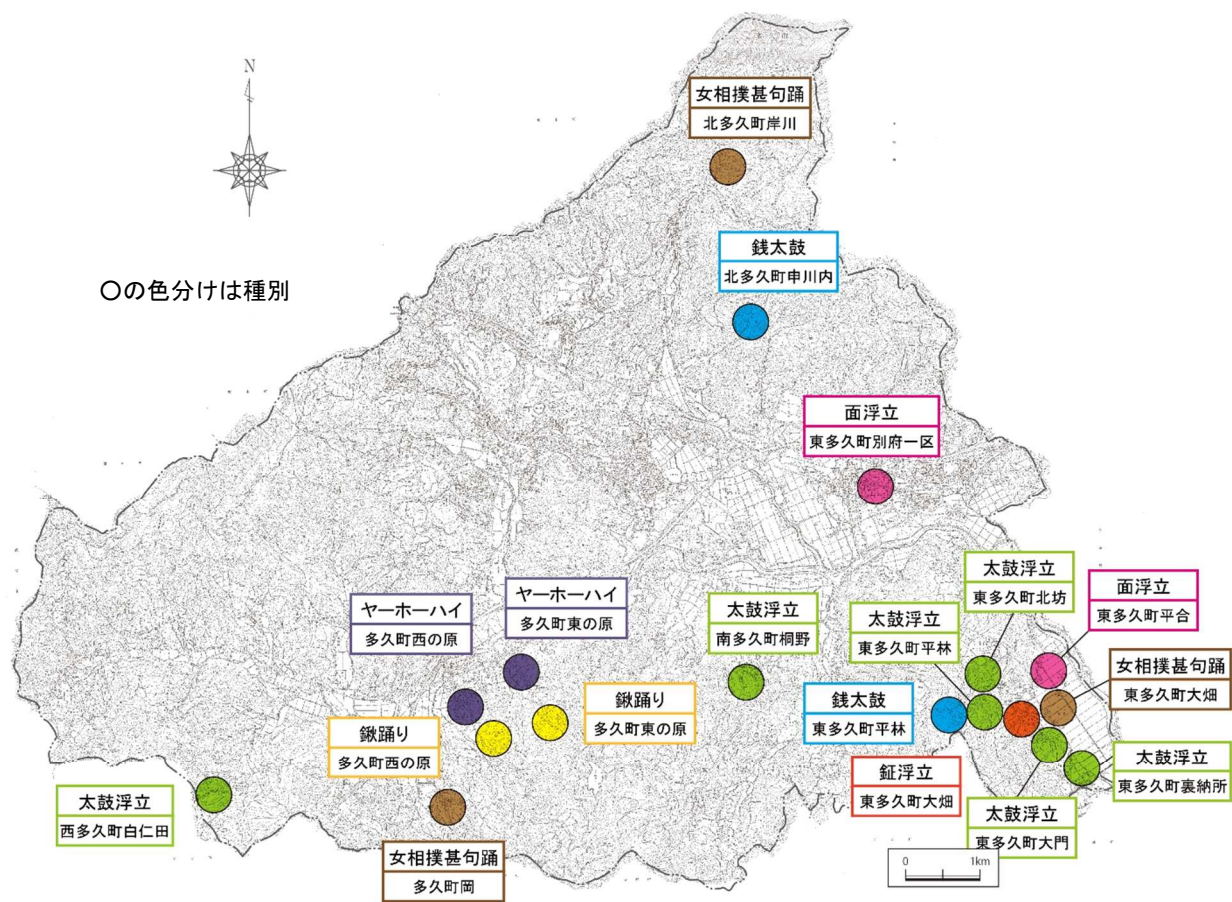
【女山の女盗賊】

伊万里へと向かう女山峠には女盗賊が出没し、旅人を襲い恐れられていた。女盗賊の名はおつるといい、母は幼い頃に死に男手で育てられた。おつるが 16 歳の時、父は大金を借り、おつるを芸者屋奉公に出した。父は迎えに来るといったがなかなか来ず、やがておつるは身籠り、店を逃げ出し女山峠で盗賊となった。

盗賊で子どもを育てるには十分な蓄えができ、最後の仕事にと通り掛かった年寄りに短刀を振りかざしたとき、その年寄りはおつると呼んだ。お前に殺されてもいいという父におつるがすがりつくと、父は観音菩薩の姿になった。おつるはすべてを悔い改め、尼になりこれまで手をかけた人たちの菩提を弔ったという。



資料 21 伝説の場所



資料 22 郷土芸能開催場所

歴史文化に関するアンケート

平成 29 年 7 月 27 日
多久市教育委員会 教育振興課

本アンケートは、多久市歴史文化基本構想策定に伴う、昨年からの調査結果に基づいて、各行政区の実情をお聞きするものです。

よりよい基本構想策定に向けてお手数ですが、ご回答のほどよろしくお願い致します。

行政区名（ ） 嘱託員（回答者）ご氏名（ ）

1. 地区の祭り・行事が年々減少していく傾向ですが、その理由を教えてください。

該当する場合に、カッコ内に○をお付けください（複数回答可）。

- ①祭り・行事の担い手が不足しているため（ ）
- ②祭り・行事の関連施設、用具などが老朽化し利用できにくいため（ ）
- ③祭り・行事を開催する費用が不足しているため（ ）
- ④祭り・行事の技術、手法などが伝承されなかったため（ ）
- ⑤その他（ ）

2. 地区において、何か工夫や新たな試みによって祭り・行事が維持・継承されている際、該当するカッコ内にその祭り・行事名をお書きください（複数回答可）。

- ①回数・頻度を考慮して実施している（回数を少なくするなど）。（ ）
- ②主催団体を変えて実施している（合同で行うなど）。（ ）
- ③規模を縮小して実施している。（ ）
- ④その他（ ）

3. 地区の歴史文化を維持・継承していくため何が必要だとお考えでしょうか。

ご自由にご記入をお願いいたします。

[]

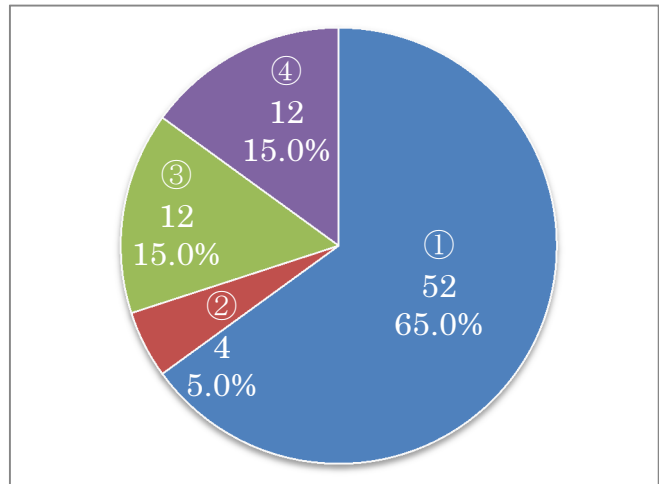
以上です、ご協力ありがとうございました。

歴史文化に関するアンケート結果 （集計 H29/9/7 現在）

行政区 107 地区 嘱託員 104 人 回答 80 人 (76.9%)

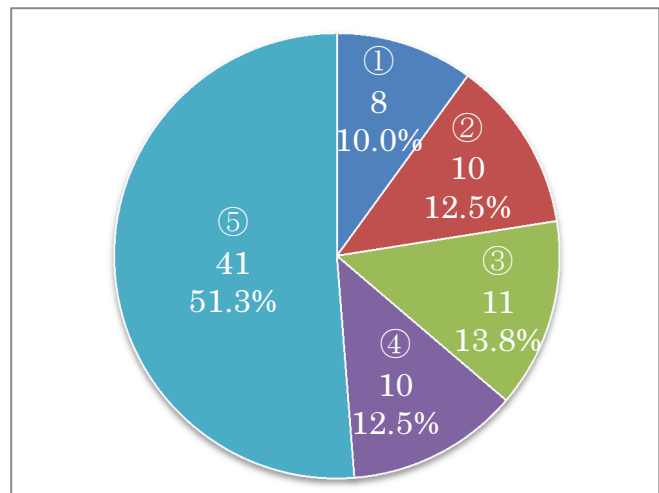
問 1

- ①担い手不足 52 件 (65.0%)
- ②関連施設・用具等の老朽化 4 件 (5.0%)
- ③費用不足 12 件 (15.0%)
- ④伝承途絶 12 件 (15.0%)



問 2

- ①回数・頻度を考慮 8 件 (10.0%)
- ②主催団体改変 10 件 (12.5%)
- ③規模縮小 11 件 (13.8%)
- ④その他 10 件 (12.5%)
- ⑤無回答 41 件



問3 祭り・行事の維持継承への工夫

町名	行政区名	祭り・行事の維持継承への工夫
東多久町	平合	八天山、天神さん→主催団体を変えて実施している（合同で行うなど）
	松瀬	規模を縮小して実施
	古賀一区	規模を縮小して実施
	古賀三区	伝統行事である恵比須まつり（形骸化しているため）に子供の参加行事を増やす。 スイカ割・花火・かき氷づくり・願い事、笹の奉納
	別府一区	メンバーを他地域からも集めている
	別府三区	もぐら打ち→主催団体を変えて実施している（合同で行うなど）
	仁位所	回数・頻度を考慮して実施している（回数を少なくするなど） 主催団体を変えて実施している（合同で行うなど）
	旭ヶ丘	主催団体を変えて実施している（合同で行うなど）
南多久町	長尾	4年生以上の男子で行っていた行事を全児童で行う。1年生女子も含めて
	西ノ谷	女性が仕事に行く様になったから時代の流れではないか
	庄	日時限定の祭りとか、日曜日に変更したりで、参加者の確保を行っている。 村祈祷、風ごもり、彼岸道づくり。
	笹原	祇園祭→規模を縮小して実施
多久町	下鶴	祇園祭・権現神社祭・兵糧小路祭→規模を縮小して実施
	東の原	開催日を→祝日、日曜日 合同祭→聖光寺冬祭り、黒髪神社祭り
	撰分	地区総会・地区懇親会→回数・頻度を考慮して実施している（回数を少なくするなど） 堤草払い→主催団体を変えて実施している（合同で行うなど） 区有林の下刈り→規模を縮小して実施
	栄町	規模を縮小して実施
西多久町	板屋上	規模を縮小して実施
	板屋下	回数・頻度を考慮して実施している
	船山	回数・頻度を考慮して実施 村祈祷、日曜日 祇園祭
	谷	規模を縮小して実施 駄地疫神社祇園祭、彼岸ごもり年2回
	平古場	祇園祭、神待ち→青年団が担当していたものを全戸から3戸ずつで担当
	吉の尾	彼岸ごもり春→回数・頻度を考慮して実施している（回数を少なくするなど） 祇園祭り→規模を縮小して実施
北多久町	相の浦	主催団体を変えて実施している（合同で行うなど）
	原口	木村祭→主催団体を変えて実施（合同で行うなど）
	岸川	盆綱引→隔年に
	四下	子供クラブ主催から区と子供クラブ合同主催へ
	中の原	子供みこし→回数・頻度を考慮して実施（回数を少なくするなど）
	東原	主催団体を変えて実施している（合同で行うなど）してみたい
	番所	彼岸籠り、宝満社御田祭、田植え仕舞い御籠→規模を縮小して実施
	横柴折	行事は日曜日に実施

地区の歴史文化を維持・継承していくための重要なこと、自由意見

- ・祠までの取り付け道路がいのしし等により、崩壊して来ているため、行事実施が困難になってきている。(平合)
- ・担い手の育成(古賀一区)
- ・古賀平は、自治会が発足して歴史が浅く、古来からの祭典、伝統的な行事がない。(古賀平)
- ・歴史文化を維持し確実に伝承していく人が少ない。(山ノ上)
- ・歴史文化を理解される担い手が増加すれば良い。(別府一区)
- ・担い手の発掘、育成が重要。地区全体がかかわる事(別府三区)
- ・地区の役員がそれらを十分に理解して行事等を継続する努力をすることが重要。(仁位所)
- ・祭り、行事を維持、継承してゆくことが重要であると人々が思う心を育むこと。(池ノ平)
- ・当地区には祭、行事はありませんが、他区での実情を見て記入させていただきました。(旭ヶ丘)
- ・当部落に手は、神社、仏閣、歴史施設等、皆無の為活動無し(古賀山)
- ・納所の両子神社は昔ながらの風習に基づき従来通り神事を引き継いでおりますが今後の問題は多数あります。住民相互の理解と協力だと思います。私達の両子区は、もともと多久市外から転入して来たばかりの地区で、伝承できる文化も歴史遺産などありません。25年以上前、多久市に来た当初、区のコミュニケーション作りや仲間作りの為にママさんバレーチームを作ったりして友達同士のつながりを強くしていきました。そんな中、納所地区の太鼓浮立に出会い地元の伝承芸能に活動し、自分たちの区でもやっていこうと市の補助金やコミュニティ事業補助金を頂き、現在でも続けております。※残念なことに多くの子供たちは市外、県外に出ており保存会を、続けていってほしい気持ちは、報われそうにもありません。大変残念に思いますが今のメンバーが永く続けられる様頑張って参ります。(両子)
- ・区民の減少傾向が問題である。若者流出がネックとなっている。(西山)
- ・人手が必要。若い方が、住みたいと思うのか。小集落は、人数が少ない上に役員の数が多くてすべての方が役員という形です。若い人が…子供…仕事の方も、市外に出られてます。(井上)
- ・地区、行事に関しては、幸いにもなんとか維持継承出来ているとおもいますが、区民の皆さんの理解が必要と思います。(瓦川内)
- ・地域住民の理解と応援が必要と考える。又、地域行事の広報のあり方等。(長尾)
- ・少子化で子供がおらず伝えられない。(上田町)
- ・歴史、文化の継承はもちろん必要だが、少しは現代風に中味を変えて、実施する事も必要と思う。(西の原)
- ・子供達に地区の歴史文化を継承していきたい。(浦町)
- ・地区や班ごとの懇親会等の飲方が少ない(撰分)
- ・地区の班長、月番さん方に協力してもらって普通どおりに行っていく。(宮ノ浦)
- ・住人が減少している為にこれから先、行事の実行が、難しくなる可能性がある。(明治佐賀)
- ・地元の歴史を学ぶ→子供達が地区の老人達と一緒に学ぶ。地区の氏神様が高所に祭られている為、地区住人の高齢化にともない行事のほとんどが地区公民館で行っている。以前は各班毎に、区の行事を担当制にして回していたが、区民の減少で、むずかしくなっている。(山口)
- ・祭り・行事のいわれが伝承されていない(文書化等)ため、その必要性が理解されていない。再度、地区の歴史・行事のいわれ等を文書化することが重要と考える。(平山)

- ・規模を縮小してでも、地域全体で何とかやっていくべき。普段から若い人へ伝承していくことが必要である。(平古場)
- ・区の人員が少なくなったため、行事ができない。(倉持)
- ・人口を増やす(相の浦)
- ・年間行事表により現在実施しているが、参加する人(高齢化している為)が少なくなっている。費用の問題等(松ヶ浦)
- ・歴史の事が余り理解されていない。立山神社を基本に於いて実施してはどうかと考えている。(東原)
- ・小侍区北方の「不動院：オタキ」への参拝者が全くない状況となっている。お堂も老朽化している、参道の清掃も難しく、「お観音さん」境内へ移設(石造物6体)を検討中です。なお、移設すれば、市教育振興課へ小侍区よりご連絡いたします。(小侍)
- ・住民の協力(高木川内)
- ・夏祭りを現在、どうにか維持しているが、継承に不安である。(住民の高齢化)(中多久団地一区)
- ・区民の理解と協力が全て(泉町)

資料 24 多久市の先覚者一覧

東原庠舎（多久郷校）教授陣（教諭など含む）

姓 号(名)	名	通 称	字	号	生 没 年	生没年(西暦)
河浪 自安	道忠	忠兵衛	信甫	自 安	寛永12 ～ 享保 4	1635 ～ 1719
毛利 一閑	由昌	彦十		一 閑	貞享 2 ～ 宝暦 6	1685 ～ 1756
鶴田 省菴	精	平兵衛	極夫	省 菴	正保元 ～ 享保16	1644 ～ 1731
河浪 質斎	道義	所左衛門	路甫	質 斎	寛文12 ～ 享保19	1672 ～ 1734
尾形 石可	惟重	彌三郎	復夫	石 可	承応元 ～ 元文元	1652 ～ 1736
山田 柴菴	昌相		成伯	柴 菴	寛文 2 ～ 元文 4	1662 ～ 1739
鶴田 松山	忠	九郎太夫		松 山	天和元 ～ 延享 2	1681 ～ 1745
尾形 (惟精)	惟精	七郎兵衛			生没年未詳	生没年未詳
深江 (順正)	順正	三太夫	純孝		貞享元 ～ 宝暦 9	1684 ～ 1759
原 花村	浄忠	市右衛門	忠重	花 村	貞享 3 ～ 明和 2	1686 ～ 1765
原 花祭	五	五太夫	士岳	花 祭	享保元 ～ 明和 6	1716 ～ 1769
石井 鶴山	有	有助	仲車	鶴 山	延享元 ～ 寛政 2	1744 ～ 1790
尾形 洞淵	惟民	彦右衛門	忠頼	洞 淵	享保10 ～ 文化 2	1725 ～ 1805
石丸 苔石	良篤	十兵衛		苔 石	寛延 8 ～ 文化 4	1750 ～ 1807
石丸 亀峰	良幹		礼介	亀 峰	享保20 ～ 文化 9	1735 ～ 1812
吉岡 (久寛)	久寛	源太郎のち平左衛門			明和 5 ～ 文政11	1768 ～ 1828
古賀 衡南	榮猷	形右衛門	子温	衡 南	寛政 8 ～ 天保 5	1796 ～ 1834
徳永 慎斎	恒	純右衛門		慎 斎	宝暦 3 ～ 天保 7	1753 ～ 1836
相浦 梅溪	宗敬	五平太	子興	梅 溪	宝暦 4 ～ 天保 9	1754 ～ 1838
深江 簡斎	順房	三太夫	伯良	簡 斎	明和 8 ～ 弘化 5	1771 ～ 1848
福地 黙斎	忠利	鹿之助	君夏	黙 斎	文政元 ～ 嘉永 4	1818 ～ 1851
西 鼓岳	賛	賛三郎・在三郎	叔襄	鼓 岳	享和 3 ～ 安政 4	1803 ～ 1857
大島 楷村	坤	五郎兵衛	元吉	楷 村	文政10 ～ 安政 6	1827 ～ 1859
高取 虚白堂	厚	量三郎のち大吉郎	延博	虚白堂	? ～ 慶応元	? ～ 1865
副島 擇里	紀備	秀九郎のち四郎兵衛	公漢	擇 里	文化 6 ～ 安政 6	1809 ～ 1859
石丸 魯哉	良連	十兵衛	子湖	魯 哉	天明 6 ～ 慶応 3	1786 ～ 1867
草場 佩川	韓	瑳助	棟芳	佩 川	天明 7 ～ 慶応 3	1787 ～ 1867
藤崎 静所	熊	小左衛門	西祥	静 所	文化10 ～ 明治 4	1813 ～ 1871
南里 石鼎山人	舜民	四郎右衛門	君風	石鼎山人	享和 2 ～ 明治 8	1802 ～ 1875
鶴田 鶴陰	濃	羽左衛門	淳甫	鶴 陰	文化 6 ～ 明治10	1809 ～ 1877
南里 松童	質夫	圭一郎のち蔵太	君樸	松 童	文政 8 ～ 明治11	1825 ～ 1878
江口 烏水	帆	平之進	萬里	烏 水	? ～ 明治11	? ～ 1878
副島 地潜	本格	益三郎のち本格	仲知	地 潜	天保10 ～ 明治13	1839 ～ 1880
鶴田 嫩圪	斌	平治のち十郎兵衛	仲斌	嫩 圪	寛政12 ～ 明治14	1800 ～ 1881
於保 古江	貞夫	武十のち貞夫		古 江	? ～ 明治15	? ～ 1882
澤井 梅野	威	泰助	季山	梅 野	文化 7 ～ 明治17	1810 ～ 1884
草場 船山	廉	立太郎	立大	船 山	文政 2 ～ 明治20	1819 ～ 1887
鶴田 斗南	皓	豫太郎のち彌太郎	玄縞	斗 南	天保 5 ～ 明治21	1834 ～ 1888
須藤 悟山	忠模	修助	楷甫	悟 山	天保 2 ～ 明治22	1831 ～ 1889
田上 湖南	綽俊	馬之助	子裕	湖 南	天保 2 ～ 明治26	1831 ～ 1893
深江 帆崖	順暢	左馬之允	有美	帆 崖	文政10 ～ 明治26	1827 ～ 1893
馬場 鷺溪	亨		子宏	鷺 溪	天保元 ～ 明治27	1820 ～ 1894
古賀 種竹	静修	助太郎	景因	種 竹	弘化 3 ～ 明治29	1846 ～ 1896
徳永 桐岡	彰	八郎左衛門	其常	桐 岡	文化14 ～ 明治33	1817 ～ 1900
徳永 南塘	強	晋太郎	子南	南 塘	天保10 ～ 明治34	1839 ～ 1901
鶴田 飛陵	暢	喜八	静懷	飛 陵	嘉永 3 ～ 明治36	1850 ～ 1903
柴田 鶯谷	勝永	小太郎	思郷	鶯 谷	天保 3 ～ 明治35	1832 ～ 1902
中島 龍墟	亮平			龍 墟	天保10 ～ 明治37	1839 ～ 1904
石井 湯崖	忠亮	新平	子弼	湯 崖	天保 4 ～ 明治40	1833 ～ 1907
梶尾 虚舟	清		子潤	虚 舟	天保11 ～ 明治42	1840 ～ 1909
相浦 藍崖	宗惟	武兵衛	世允	藍 崖	天保 7 ～ 明治42	1836 ～ 1909
蒲原 素洞	政標	武七	伯象	素 洞	天保元 ～ 大正 5	1830 ～ 1916
福地 紫海	隆春	得三のち隆春	子詢	紫 海	天保12 ～ 大正 6	1841 ～ 1917
鳥越 東里	剛樸	廉蔵	子近	東 里	弘化元 ～ 大正 8	1844 ～ 1919
徳永 峽村	鉉	鼎	鼎郷	峽 村	文政11 ～ 大正 9	1828 ～ 1920

育む

<藩校>

弘道館（佐賀藩校）教授・教諭など

姓 号(名)	名	通称	字	号	起 用 年
石井 鶴山	有	有助	仲車	鶴山	天明元 (1781)
石丸 亀峰	良幹		礼介	亀峰	天明 4 (1784)
深江 簡斎	順房	三太夫	伯良	簡斎	寛政13 (1801)
草場 佩川	韓	瑳助	棣芳	佩川	天保 6 (1835)
袋 (久平)	久平		允中		明治 2 (1869)

鹿島学館（鹿島藩）教授

姓 号(名)	名	通称	字	号	起 用 年
相浦 梅溪	宗敬	五平太	子興	梅溪	寛政元 (1789)
石橋 琴潭	潤	平蔵	子牧	琴潭	天保11 (1840)

田代学館（元厳原藩）教督

姓 号(名)	名	通称	字	号	起 用 年
草場 船山	廉	立太郎	立大	船山	明治 3 (1870)

<私塾の創設>

名 称	所在地	創設者	創設年
千 山 樓	多久	草場 船山	嘉永 4 (1851)
本 立 堂	大川野	草場 船山	明治 5 (1872)
鶴陰学舎	須古	安住 百太郎	?
邛 須 舎		田上 緯俊	明治13 (1880)
丹邱義塾	多久	田上 緯俊ほか	明治13 (1880)
猶 興 舎	北方	石井 忠亮	?

<官立学校>

東京英語学校教員

姓 名	通 称	字	号	起 用 年
多久 茂穀	乾一郎			明治 9 (1876)

東京大学助教授

姓 名	通 称	字	号	起 用 年
飯盛 挺造				明治14 (1881)

(第四高校教授・東京師範学校教授)

東京電信学校教授

姓 名	通 称	字	号	起 用 年
鶴田 暢	喜八	静懷	飛陵	明治20 (1887)

東京帝国大学工科教授

姓 名	通 称	字	号	起 用 年
志田 林三郎				明治20 (1887)

(東京電信学校校長)

第四高校教授

姓 名	通 称	字	号	起 用 年
高安 右人				明治21 (1888)

(金沢医学専門学校長)

名古屋高等工業学校教授

姓 名	通 称	字	号	起 用 年
草場 季彦				明治38 (1905)

(第七高等学校造士館教授・同志社大学豫科教授)

巣立つ

<江戸後期入門者>

弘道館（佐賀・藩校）

姓 号(名)	名	通称	字	号	進 学 年
深江 簡斎	順房	三太夫	伯良	簡斎	寛政 7 (1795)
草場 佩川	韓	瑳助	棣芳	佩川	文化元 (1804)
西 鼓岳	賛	賛三郎	叔襄	鼓岳	?
川浪 芦洲	道遠			芦洲	?
南里 格平	格平				?
多久 茂穀	茂穀	乾一郎			?

昌平黌（江戸・幕府）

姓 号(名)	名	通称	字	号	進 学 年
草場 佩川	韓	瑳助	棣芳	佩川	文化 6 (1809)
西 鼓岳	賛	賛三郎	叔襄	鼓岳	文政 8 (1825)
草場 船山	廉	立太郎	立大	船山	天保12 (1841)
草場 西山	龔生	大次郎	仙客	西山	嘉永元 (1848)

咸宜園（日田・広瀬淡窓）

姓 号(名)	名	通称	字	号	進 学 年
野口(貫一)	貫一		士梅		文政 8 (1825)
藤崎 静所	熊	小左衛門	西祥	静所	天保 8 (1837)
福地 黙斎	忠利	鹿之助	君夏	黙斎	天保12 (1841)
音成(岩五郎)	岩五郎				天保12 (1841)
松崎(雲岱)	雲岱				嘉永元 (1848)
柴田 鶯谷	勝永	小太郎	思郷	鶯谷	嘉永元 (1848)
横尾(太平)	太平				嘉永 3 (1850)
良 (俊)	俊				安政 2 (1855)
光吉(清連)	清連				文久元 (1861)
成富(与市)	与市				文久元 (1861)
森 (秀三)	秀三				文久 2 (1862)
僧 (鉄心)	鉄心				文久 4 (1864)
釋 (鉄翁)	鉄翁				元治元 (1864)
釋 (智雲)	智雲				元治元 (1864)

適々斎塾（大阪・緒方洪庵）

姓 号(名)	名	通称	字	号	進 学 年
尾形(良益)	良益				嘉永 2 (1849)
西 (春涛)	春涛				安政 6 (1859)

象先堂（江戸・伊東玄朴）

姓 号(名)	名	通称	字	号	進 学 年
山口(元逸)	元逸				嘉永 3 (1850)
鶴 (蔵六)	蔵六				嘉永 3 (1850)
尾形(良益)	良益				嘉永 3 (1850)
岡橋(賢道)	賢道				嘉永 7 (1854)
深江 帆崖	順暢	左馬之允	有美	帆崖	安政 3 (1856)

<明治初年入学者>

長崎英学校・東京開成校

姓 名	通 称	字	号	進 学 年
袋 久平		允中		明治 2 (1869)
鶴田 雄	揆一			明治 2 (1869)
古賀 静修	助太郎	景因	種竹	?
鶴田 進				?

昌平大学

姓 名	通 称	字	号	進 学 年
多久 茂穀	乾一郎			明治 2 (1869)
於保 貞夫	武十		古江	明治 2 (1869)
副島 本格	益三郎	仲知	地潜	明治 2 (1869)

(「巢立つ」続き)

工部省 寮

鉱山寮

姓 名	通 称	字	号	進 学 年
高取 伊好	生三郎	好郷	西溪	明治 5 (1872)

電信寮

姓 名	通 称	字	号	進 学 年
石井 理一				?
鶴田 暢	喜八	静懐	飛陵	?

工学寮

姓 名	通 称	字	号	進 学 年
志田 林三郎				明治 5 (1872)

外務省 洋語学所

姓 名	通 称	字	号	進 学 年
飯盛 挺造				明治 4 (1871)

慶応義塾

姓 名	通 称	字	号	進 学 年
大塚 達徳		三甫		明治 4 (1871)
高取 伊好	生三郎	好郷	西溪	明治 4 (1871)

東京外国語学校

姓 名	通 称	字	号	進 学 年
高安 右人				明治 9 (1876)
草場 謙三郎	謹三郎	士行	金台	明治10 (1877)

海 を 越 え て

海外留学・視察

姓 名	通 称	字	号	留学年・留学先
袋 久平		允中		明治 3 (1870) 独・英・仏
鶴田 雄	揆一			明治 3 (1870) 英・仏
多久 茂毅	乾一郎			明治 4 (1871) 米
森 誠太郎				明治 4 (1871) 米
鶴田 皓	豫太郎	玄縞	斗南	明治 5 (1872) 欧
志田 林三郎				明治13 (1880) 英 (グラスゴー大学)
飯盛 挺造				明治17 (1884) 独 (フライブルグ大学)
石井 理一				明治23 (1890) 欧
高安 右人				明治32 (1899) 独

『多久市史第二巻近世編』『人物編』『重要文化財 多久聖廟』
『儒林』及び、『東原庫舎創設三百年記念 東原庫舎と湯島聖堂』平成11年 多久市郷土資料館を参考に作成。

同書の参考文献

『多久聖廟沿革』 大正 8年 大塚巳一著
『舊多久邑人物小志』 昭和 6年 舊多久邑史談会編
『佐賀県教育史第一巻』平成元年 佐賀県教育委員会編



平成 29 年度文化芸術振興費補助金
(文化遺産総合活用推進事業)

多久市歴史文化基本構想

平成 30 年 3 月

発行 多 久 市

〒846-8501 佐賀県多久市北多久町大字小侍 7 番 1

協力 株式会社修復技術システム

〒812-0023 福岡市博多区奈良屋町 5 番 10 号